

うみと水とぞく

もっと知ってスマスイ

Suma
Aqualife Park
in KOBE

2016
12

December

特集
SPECIAL ISSUE

スマスイ 開業30年を前に、 新たななる挑戦

トピックス

ガラスの向こう側
須磨ドルフィンコースト
プロジェクト2016

スマスイ生物図鑑 part27

研究の窓
きらくえん
亀楽園の6年

出張見聞録
深海出張

スマスイ職員名鑑



特集
SPECIAL ISSUE

スマスイ開業30年を

飼育教育部 部長
大鹿達弥
魚類飼育課
長田信人

「基地」。子どもの頃に近所の空き地に作った“秘密基地”、
怪獣映画に出てくる“地球防衛基地”など、
世の中にはさまざまな基地がありますが、何となくワクワクするというか、
高揚感があるものだと思いますか？

（ 祝!! スマスイ初の定住型基地への取り組み ）

唐突に「基地」という話で何だと思われるでしょうが、最近私の所属する飼育教育部の中では重要なキーワードになっています。飼育員が口にする基地は、正確に言うと「水族館に魚を供給するための地方の漁港」を指します。これまで須磨海浜水族園では全国各地の漁港（正確には漁協さんですね）に、展示用の魚を集めるのに協力してもらっていました。しかし、漁師の方々も忙しい仕事の中での採集協力なので、私たちが欲しい魚を全て集めてもらうことはできませんでした。そして今回ついに、飼育員を現地に長期出張させ、毎日

漁師さんと船に乗り、一緒に魚を集めることのできる、念願の「定住型魚類供給基地」設置への足掛かりとなる取り組みを2016年7月に始めました。このために、あらゆる事を吟味し、約1年をかけて調整してきました。場所は高知県幡多郡大月町古満目です。当園から車で約7時間かかります。10月現在、滞在を始めて約3カ月が経過しましたが、予想通りいろいろな面で素晴らしい所です。以下、7月から「初代古満目隊長」に就任している飼育員から現場報告を届けてもらいます。（大鹿）

（ 高知県古満目からの報告 ）

古満目は、時間がゆったりと流れ、きれいな空と緑豊かな海岸線に囲まれた田舎の漁港です。近くにはダイビングの名所もあり、港の岸壁からはハリセンボンやクマノミを見ることができます。そんな港のすぐ裏に当園の魚類供給基地

があります。
基地出張飼育員の一番の目的は、漁船に同乗して水族園用の魚をもらうこと…ではなく、地元の人たちと仲良くなることです。なぜなら、網に掛かった魚を素早く水槽へ運んだ

↓漁師の言葉“大漁旗”

↓漁船2隻で網を上げる



前に、新たなる挑戦

り、慣れない土地で不自由なく生活したりするためには、漁師さんや地元の人たちの協力が必要不可欠だからです。実際、現地に行くまで、どんな魚が捕れるかということよりも、地元の人や漁師さんたちに受け入れてもらえるかという不安の方が大きかったです。幸いにも地元の人や漁師さんは気さくな方が多く、よく話し掛けてきていただき、そのおかげでリラックス&集中して仕事に取り組むことができます。

古満目には、港の近くと沖合の2カ所に定置網があり、別々の組合が運営しています。私はそれぞれの組合の船に1日交替で乗船し、網に入った魚の中から水族園で欲しい魚を探して取り上げさせてもらいます。多くの場合、漁師さんにとってほしい魚を伝えるのですが、このとき困るのが魚の名前です。漁師さんは地方のオリジナルな名前(地方名)で呼びますが、図鑑に載っている標準和名しか知らない飼育員には、どの魚のことかさっぱり分かりません。今では地方名も覚え、不安はなくなりましたが、最初は「赤い魚」「しましまの魚」など見た目の特徴で伝えていました。

また、港で水族園用の魚の世話をしていると、どんな珍しい魚なのかと漁師さんや地元の方が見に来られます。しかし、珍しい魚はほとんどおらず、大抵がよく網に入る普通の魚です。それでも皆さん「意外ときれいな魚や」とか「こんな魚も捕れるんやな」といった反応をされます。その反応を見ながら、普段魚と接している漁師さんや自然豊かな場所に住む人々に、身近にいるありふれた生きものを違う視点で見ってもらうことも当園の役割の一つではないか、と考えてしまいます。そういった活動をする場所としても魚類供給基地は意義深いものであり、地域の漁港への設置に取り組むことには大きな意味があるのではないのでしょうか。(長田)

↓選別された魚



↓網に入った色とりどりの魚





1 TOPIC

「須磨ドルフィンコーストプロジェクト2016」を開催!

開催期間=7月14日~8月31日

今年の「須磨ドルフィンコーストプロジェクト」は天候に恵まれ、透き通るようなきれいな海の中を泳ぐイルカたちの姿は、より生き生きとして見えました。今回、須磨の海を泳いだイルカは、4回目となるジーナと初めてのケイトでした。この2頭は園内のプールでもとても仲が良いので、海に来ていつも一緒に過ごしていました。浅瀬から砂浜に乗り上げたり、海藻を持ってきたり、魚を捕まえたりと海での遊びを満喫している様子でした。お互いのまねをするように、同じ遊びをするのです。そんな仲の良い2

頭ですが、ある時だけ仲が悪くなります。われわれトレーナーに体を触らせて遊んでいる時です。まるで小さな子どものようにトレーナーを取り合うのです。どちらも均等に相手をするようにしていましたが、片方だけと遊んでいる時間が長くなるとプイッとどこかに行ってしまうこともありました。イルカ同士の関係や個体の性格が垣間見えた一幕でした。



↑魚を捕まえて遊ぶジーナ



↑砂浜で遊ぶケイト



↑海での様子

2 TOPIC

スマスイ動物病院 公開解剖への挑戦! アオザメを解剖しました!

実施日=7月30日

スマスイ動物病院では公開解剖も視野に入れていますが、今回は全長約2m、体重約150kgのアオザメで試験的に実施しました。流線形の体、引き締まった筋肉、いかにも危険そうな鋭い歯、その他興味深い特徴がたくさんありました。いろいろな生きものの形態の魅力をいかに面白く伝えられるか、今後も試行錯誤しながらより良いプログラムを作っていきたいと考えています。



↑解剖室に搬入されるアオザメ



←解凍中のサメの肌にタッチ



3 TOPIC

「Aloha!! イルミネーション」を開催!

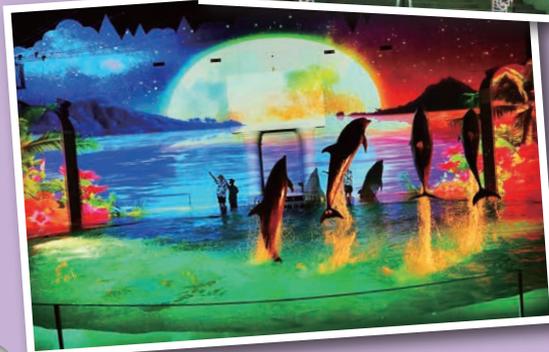
開催期間=7月14日~8月31日

この夏は営業時間を22時まで延長し、20時からは当園初となる3Dマッピングと融合したイルカトワイライトライブを実施しました。また、園内各所をハワイアンイルミネーションで彩り、限定のフードやドリンクの提供、フラダンスイベントなどでも来園されたお客さまにハワイの雰囲気をご存分に楽しんでいただきました。

パイナップルロード➡



↓マッピングコラボのイルカトワイライトライブ



4

TOPIC

第33弾サイエンスカフェ 「日本のカエルとサンショウウオ」を開催!

開催日=6月11日

カエル研究の世界的な第一人者で京都大学名誉教授の松井正文氏をお迎えし、大水槽前エントランスホールで講演いただきました。日本産の両生類全種の解説や分類、フィールド調査にまつわるエピソードなど松井氏ならではのお話に、参加者の方々も興味深げに聞き入っており、両生類への理解をさらに深めていただきました。

←松井正文
京都大学名誉教授



↑サイエンスカフェの様子



5

TOPIC

商業施設・ブルメール舞多間との コラボレーション企画 「おさかなウォッチング」を開催!

開催期間=7月16日~8月31日

ブルメール舞多間の館内各所に、ベタやピラニアなど10種類の生きものを面白い特徴の解説付きで展示しました。生きもの博士を目指すオリエンテーリング式のイベントでは、抽選でスマスイグッズなどをプレゼントする特典も用意しました。間近で観察し、面白い特徴を知ること、生きものへの興味を持つきっかけになっていたら幸いです。



↑展示風景



↑イベント紹介チラシ

6

TOPIC

謎の巨大ウミウシ 「ヤマトメリベ」を展示!

展示期間=6月3日~7月4日

ヤマトメリベ (*Melibe japonica*) は、体と同じくらい大きな捕食器で餌を包み込んで食べる姿が特徴的な、体長50~60cmにもなる大型のウミウシ。めったに採集されることがなく、詳しい生態も

分からない稀少な生きものです。今回、大阪湾で採集された個体が実に5年ぶりに当園に運び込まれました。短期間の展示でしたが、お客さまから「何これ!」という声を多数頂きました。



↑ヤマトメリベ



↑ヤマトメリベの捕食器

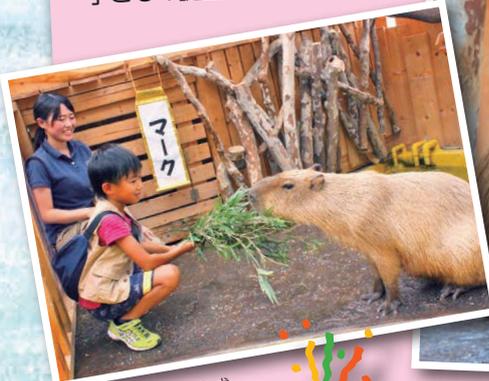
7

TOPIC

メスのカピバラが来園! オスの命名式を開催!

命名式開催日=9月17日

7月28日、姫路セントラルパークからメスのカピバラ(愛称:ローラ)が当園にやって来ました。名前の無かったオスの愛称を募集した結果、1,300通を超える応募の中から、「マーク」に決定しました。マークとローラは、お見合いもうまくいったようで、現在、仲の良い様子をご覧くださいことができます。命名者を招待した命名式では、多くの方々と一緒に2頭の子どもの誕生を願いました。

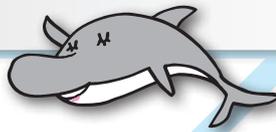


↑マークの命名式



↑搬入当初のローラ





スマスイ職員がさまざまな切り口から現場の裏側について紹介します。

須磨ドルフィンコーストプロジェクト2016 ～「人」とのつながりが生み出す 一大プロジェクト～

※1 須磨ドルフィンコーストプロジェクト(SDC)とは、須磨海岸に飼育イルカ2頭を遊泳させる取り組み。①イルカの飼育環境の向上、行動の変化検証、②環境教育、環境保全の推進、③須磨海岸のイメージアップ、海岸地域の活性化を目的に2013年度より開始した

“須磨海岸にイルカが泳ぐ風景”、イルカライブやペンギン飼育に従事し、園外に出る機会がほとんどなかった10年前の私には想像もできませんでした。須磨ドルフィンコーストプロジェクト(SDC)※1におけるイルカの行動、トレーニング風景などについてはこれまでも紹介してきましたが、今回は角度を変えて、準備や運営に欠かすことのできない、かけがえない「人」とのつながりを紹介します。



1 地元の漁師さんとのつながり

海上施設の設営や撤収には、網やいけすえいこすを曳航する、アンカーを沈めるといった大掛かりな作業が伴います。陸上重機での整備はもちろん、潜水作業や洋上作業の実施に当たっては、作業船や警戒船を配置します。そこで活躍していただくのが地元の漁師さんです。設営や撤収時はもちろん、天候が荒れる前の安全対策、イルカを移送する時にも力を貸していただいています。地元の海を知る漁師さんは、SDCの縁の下を支えるとても大きな存在です。

↓漁師さんと協力して網を整備



↑いけすの運搬作業



↑海岸でのゴミ拾いの様子

↓最終日に実施したイルカとのふれあい



2 地域の小学生とのつながり

神戸ライフセービングクラブの協力の下、地元の小学生の皆さんと「イルカ見守り隊」を発足し、海岸の清掃活動を行いました。参加者は夕刻、海岸のごみを拾いながらSDCエリアまで歩きます。子どもたちとイルカクイズをしたり、その日にあった出来事を話したり、海岸のごみ拾いを通じて交流の輪が広がりました。イルカに近づいた最終日、子どもたちの目は輝いていました。

3 お客さまとのつながり

SDCでは、お客さまと職員の会話が自然と弾みます。「こんなに近くで見られると思わなかった」「イルカが伸び伸び泳いでいて楽しそう」など、イルカを間近で観察できるからこそ生まれるお客さまの声、生き生きとした笑顔に、職員もたくさんの元気をもらいました。「お兄さんたち、真っ黒ですね」、SDCでは職員の日焼けもお約束の話題です。管理職の私が飼育現場に出る機会は減りましたが、SDCでは普段の飼育解説、潜水作業、団体レクチャー実施など、現場の最前線に立ちます。そこで交わすお客さまとの会話から、新しい発見やアイデアが生まれます。「人」とのつながりは、私自身がSDCを楽しむ醍醐味であると言っても過言ではありません。



↑イルカを通じて縮まるお客さまと職員の距離



「須磨ドルフィンコーストプロジェクト」のガラスの向こう側は？



A 地域が力を合わせて創り上げる、 海の「いのち」を学び育むプロジェクト

SDCは当園だけで実施できるものではなく、神戸市、海上保安部、衛生監視事務所、警察などたくさんの関係者、海の家や地元商店街、地域の方々の理解や協力があって初めて成り立つプロジェクトです。SDCを通じて、多くの方が動物への興味を深め、海や自然環境のことを考えていただく機会になれば幸いです。今年は好天の下、1日も中止することなく終ることができました。協力いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。



カエルアンコウ

Antennarius striatus

海水魚

岩手県以北の太平洋側と琉球諸島を除く日本沿岸全域;南シナ海~インド・西太平洋,大西洋.

沿岸の砂底や砂泥底に生息する小型のアンコウの仲間。当園には時々、底引き網で混獲されたものが持ち込まれる。橙、黄、白、黒などの体色だけでなく、茶色の細かなすじ模様のある個体や、皮弁の多い個体など、外見はバラエティーに富む。付け根部分が長く伸び、腕のように発達した胸びれを使って、海底をはって移動する。口の上に「エスカ」と呼ばれる、背びれの一部が伸長した房状のものがあり、これをくねくねと動かすことで引き付けた小魚を一瞬で捕食する。胃袋は伸縮性があるため大きく広がり、自分の体長と同等の大きな獲物も丸のみにしてしまう。

[今北大介]



キタユウレイクラゲ

Cyanea capillata

無脊椎

東北地方以北の太平洋沿岸;~北極海を中心とした冷海水域.

世界最大級になるクラゲ。北極周辺の海域では、傘が直径2m以上、触手が長さ40mに成長した個体が見られることもある。ミジンコ類やオタマボヤ類、魚卵、稚魚、他のクラゲ類などあらゆる動物プランクトンが餌になる。特にミズクラゲやクシクラゲ類など、ゼラチン質の餌を食べた稚クラゲは、傘、触手共に成長が良くなることを示した研究があり、生息海域の動物プランクトン相に本種の発生数や成長が多大な影響を及ぼしているとされる。飼育下では、本種の細くて長い触手が水槽の掃除道具にくっついてしまい、掃除の邪魔になる。

[宮嶋 彩]



イリエワニ

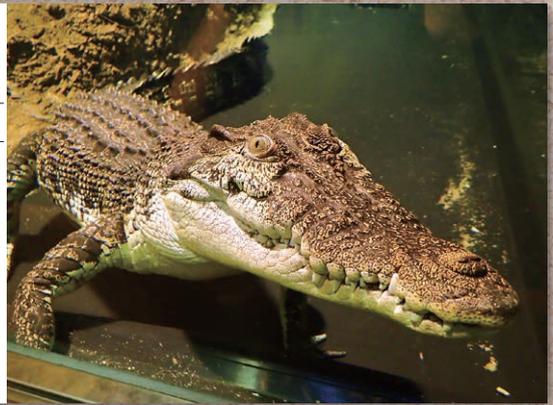
Crocodylus porosus

爬虫類

東南アジア~スリランカを含むインド東部,メラネシア,オーストラリア北部.

現生する爬虫類で世界最大になり、オスは体長6m、体重1tになる一方、メスは最大でも体長3.2m程度である。英名では“Saltwater crocodile”と呼ばれ、河川、湖沼、河口域だけでなく、ワニの仲間の中で唯一沿岸海域でも活動できる。海を泳いで渡れるため、ワニの中で最も広い分布域を持つ。幼体の時期には、小型の昆虫類、甲殻類、魚類、両生類、爬虫類など多様な食性を示し、成体になると、ウミガメなどの大型の爬虫類の他に、鳥類、ヒトを含めた大型の哺乳類を捕食するようになる。当園では、さかなライブの中で捕食の様子を実演しているが、非常に学習能力が高く、2回目にして餌の投下場所を記憶した。

[東口信行]



カジカガエル

Buergeria buergeri

両生類

本州,四国,九州および周辺離島の一部.

河川の上流域およびその周辺の森林に生息するアオガエル科のカエル。体色は河原の石に似た灰褐色であり、石の上で見つけることは難しい。四肢の指には吸盤が発達し、ぬれた岩上や樹上で活動しやすくなっている。繁殖期は5月から7月頃までで、オスは夜な夜な水辺の石の上で「フィーフィー」と美しい声で鳴いてメスを誘う。ペアができると川の中の石の下で産卵をする。オタマジャクシは、水に流されないように薄く細長い形をしており、吸盤状になった口で水中の岩に吸い付くことができる。岩国市(山口県)と真庭市(岡山県)では、主たる生息地の一面を天然記念物に指定し、手厚く保護している。

[笹井隆秀]



トロフェウス・モーリー

Tropheus moorii

淡水魚

タンガニカ湖(中央アフリカ).

浅瀬の岩場に生息し、そこに生える糸状藻類を主食とする全長15cmほどのシクリッドの仲間。縄張りを持ち、侵入した同種はもちろんのこと、糸状藻類食の種に対しては非常に攻撃的に追い払う。同様の食性でも、単細胞藻類食の種や、本種の幼魚に対してはそれほどでもない。湖から数km離れて点在する岩場にそれぞれ異なった体色の個体群が存在するが、これは食性と縄張りが要因で、岩場間の遺伝的交流が乏しくなることにより生じたものと考えられている。

[小坂直也]





亀楽園の6年

学術研究統括 亀崎直樹

↑日中は多くのアカミミガメが甲羅干しをする亀楽園。入園者の滞在時間が長く、当園では人気スポットとなっている

亀楽園の誕生

日本に侵入してきたミシシッピアカミミガメ(以後、アカミミガメ)に関する問題を世間に啓発し、研究することを目的に造られた亀楽園も、完成して7年目を迎えることになりました。亀楽園ができた2010年頃は、アカミミガメ問題も今のように注目を浴びてはならず、環境省でさえも「まだ日本で繁殖しているかどうか分からない」というありさまでした。ただ、爬虫類の研究者の間ではその問題は深刻に受け止められ、特に日本固有種であるニホンイシガメの減少や生物多様性の消失との関連について、日本爬虫両棲類学会においても議題に挙がっていました。



↑亀楽園の全景。手前左では幼体が飼育されている。持ち込まれたアカミミガメはここに収容される。現在、飼育されていたカメは受け入れていない

その議論の中で、いつも話題に上るのがアカミミガメの収容施設の必要性でした。アカミミガメを駆除するといっても、駆除したカメをどうすればいいのか、そこがネックになっていたのです。そこで筆者が須磨

海浜水族園の園長に就任した2010年、アカミミガメの収容施設であり、またその生態研究の場となる亀楽園を園内に設置しました。亀楽園の敷地は幅13.5m、奥行き7.2mで、水量8㎡のプールが付いています。ただ、前施設の跡地にできたので、その形状の影響を大きく受けています。

アカミミガメ・パスポート制度

亀楽園の社会的なインパクトは小さくはありませんでした。まず、施設が出来上がった年の8月に、駆除したアカミミガメを持ち込んだ人は無料で入園できるアカミミガメ・パスポート制度を実施したところ、8月7日から9月7日までに507人が798個体ものアカミミガメを持ち込んだのでした。この制度、自然のためには良いことかもしれませんが、園の経営のためにはよろしくありません。その後の継続は危ぶまれましたが、それでも繁殖期に当たる6月には毎年このアカミミガメ・パスポート制度を実施し、多くのアカミミガメが駆除されています。



↑アカミミガメ・パスポートの受付窓口。受け付け後、捕れた場所や日付、サイズなどを記録している

アカミミガメはどうしているか

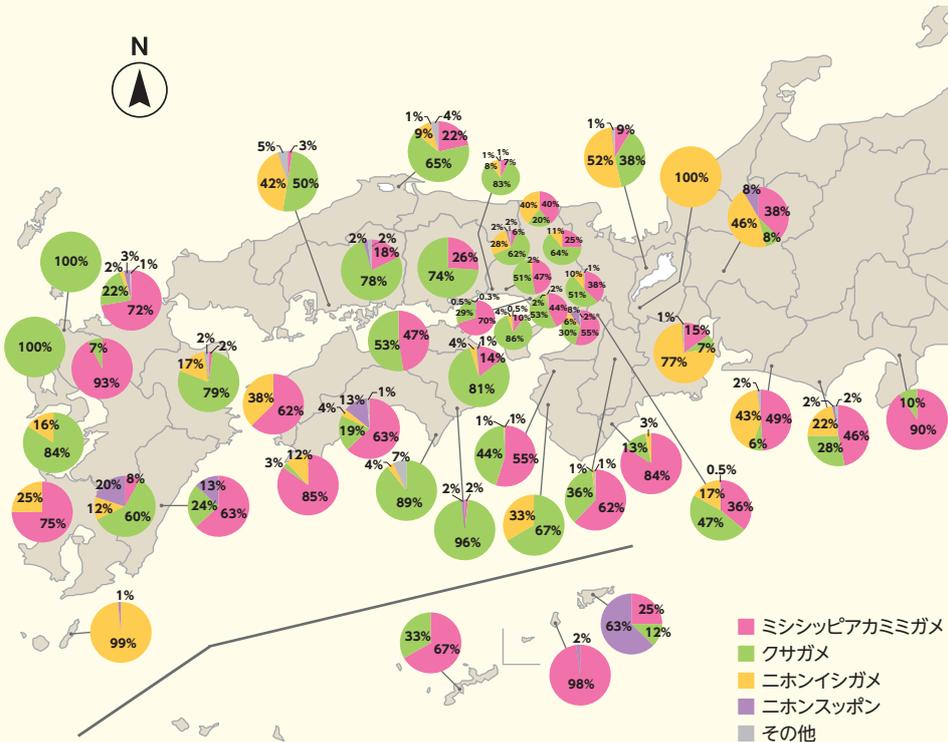
亀楽園のことが知れ渡ると、さまざまなところから持ち込み話が舞い込むようになります。基本的には市民が個人レベルで捕獲したカメを受け入れるつもりでしたが、池の水をくみ出して掃除する「かいぼり」で捕れたカメ、浄水場の取水口で捕れたカメのように大量に持ち込まれることもありました。そのようなときも、できるだけ断らないようにして、カメを受け入れました。とにかく世間にもどのようなカメがいるのかを把握したかったからです。亀楽園の収容量は定かではありませんでしたが、1,000個体を超えるとかかなり窮屈な感じでした。とりあえず無秩序に受け入れていると、あっという間に過密状態になりました。

ここでどうしてもカメを安楽死させる必要が出てきました。冷凍庫で殺処分するのですが、カメの中には市民の愛情のこもった個体もいるのです。そこで、亀楽園に収容するカメは全て識別し、市民が愛情を持って持ち込んだカメは殺処分しないように心掛けました。このような活動が世間に知れ渡るにつれて、大学の実習でアカミミガメを使ってくれるところが出てきました。例えば、奈良県立医科大学、東邦大学、京都大学などでは脊椎動物の解剖実習でアカミミガメを使用してくれ、少しは有効利用の道も開けつつあります。

野生のアカミミガメ

亀楽園の運用とともに、当園では静岡より西の地域でアカミミガメがどの程度定着しているのかを調べました。南は南西諸島の沖永良部島から東は静岡までの518カ所のため池にわなを仕掛け、とにかくカメを捕るのです。それぞれの調査ため池には3~5個のわなを仕掛けました。2010年から2014年までにスタッフが捕獲したカメは5,000匹以上になります。地方によって種組成は異なりますが、日本ではアカミミガメとクサガメがそれぞれ40%を占め、ニホンイシガメは15%ほどしかいません。クサガメも中国大陸からの外来種で、数百年前に日本に入ってきたことが最近の研究で分かってきました。日本のカメの80%が外来種だということになります。

アカミミガメの分布についても分かってきました。アカミミガメは調査した池の



↑西日本での淡水ガメの分布図。各地域の種組成を示した

36.7%で生息が確認されました。特に、近畿地方は45.8%、中国地方は43.8%の確率で見つかりました。飼育されていたカメが放されたことで野外に定着したのなら、都市に近い場所に分布が偏るはずですが、日本全国至る所にアカミミガメはいました。佐賀平野、四万十川の河口域、熊野地方など、日本の隅々までその生息地が広がっていたのです。知らない間に日本のカメの世界は大きく変化し、それによって川や池の生態系は大きく変わってしまいました。

市民との活動

外来種、特にアカミミガメの問題を解決の方向に導くには、市民の理解と協力が不可欠です。その観点からは亀楽園は効果的でした。当園の入園者は亀楽園に収容された多くのアカミミガメを見て、あらためてその問題の根深さを考えているようです。また、市民による駆除を進めたいと考え、「親子でカメGet!」というプロジェクトも行いました。カメを捕獲してくれる親子を見つけ、カメ網を貸し出し、捕れたカメの報告をしてもらうのです。これまで50組以上の親子にカメ網を貸し出しましたが、3組の親子を除くと、捕獲は続きませんでした。市民による駆除は、順調には進まないことを

感じました。一方、カメに関するデータを残すために、当園ではカメの情報誌「亀楽」を発行しました。学会誌のようにハードルが高いものではなく、市民がカメに関する情報を持ち寄り場として誕生させました。年2回の発行ですが、世間での認知度も上がりその機能を果たしています。

行政との駆除活動

日本全体にアカミミガメがはびこっている状況で、いち早くその問題に立ち向かってくれた行政があります。兵庫県明石市です。明石市にはまだ田園地帯が広がっており、約100カ所以上のため池があります。市内のため池や河川はアカミミガメであふれているのです。明石市とわれわれは、まず、ため池での駆除活動を行いました。ため池はある程度閉鎖性が保たれているからか、いくつかの池ではアカミミガメを低密度にすることができました。それに伴い、ハスの花が回復したところもありました。アカミミガメはハスの新芽を食べてしまうのです。川での駆除も試みました。川のほぼ全域に約50m置きに100個以上のカメのわなを仕掛け、カメを捕るのです。1本の川で1,000個体以上が捕獲されます。しかし、川の場合は再びどこからかアカミミガメがやって来て、翌年には元通りに



↑カメの捕獲網とアカミミガメ。中に鮮魚を入れ、一晩置いて回収するのが一般的



↑ある池で捕獲されたアカミミガメ。わずかにクサガメも交ざっている。西日本のため池でカメを捕獲すると、北アメリカ原産の外来種であるミシシッピアカミミガメが最も多い

なってしまいます。明石市のため池や用水路は細かく複雑につながっており、カメはそこを移動していたのです。明石市とわれわれは協議会をつくり、環境省の支援も受けて、この地域からアカミミガメを減らす試みを続けています。

亀楽園の効果

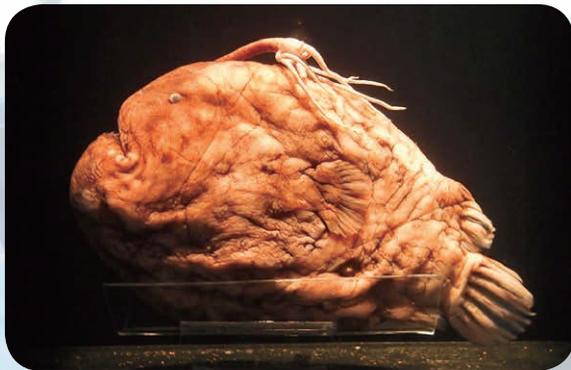
このように当園では、さまざまな方法でアカミミガメについて、問題に関する情報収集、駆除した個体の収容、生態研究、駆除およびその手法の研究、情報誌の発行、研究会の開催などを実践してきました。亀楽園の設置を契機に全国でアカミミガメの問題が注目を浴びようになり、マスコミにも何回も取り上げられるうちに、社会の関心も高まりました。環境省も2015年にアカミミガメ問題を取り扱う専門家グループを発足させ、本格的に取り組むようになりました。全国各地の行政も動き出し、ようやく日本のアカミミガメ問題への取り組みが始まりました。

日本の淡水の生態系はコイ科の魚を中心とした極めて柔らかな生態系です。それが、各地でアカミミガメなどの外来種によって破壊されようとしています。これを駆除するのは無理だと言う人はたくさんいます。しかし、何とかして日本の池や川を守ること、それも日本の水族館の使命だと考えています。

深海出張

この夏の特別展として「スマスイ深海研究所」を開催しました。生きた深海魚をバンバン展示できればいいのですが、採集から輸送、飼育まで全ての過程で困難が伴うため、どうしても標本がメインとなってしまいます。その展示物の一つとして「チョウチンアンコウ」の標本を借用するため、静岡県にある東海大学海洋科学博物館へ出張してきました。

さて、一口に標本と言ってもさまざまで、学術的に価値があっても、ぐちゃぐちゃで何が何だか分からない種類や状態のものもあります。その中でもメジャーな種類で姿形が分かりやすいものを探したところ、



↑借用してきたチョウチンアンコウ

同館が状態の良いチョウチンアンコウを所蔵していたのです。チョウチンアンコウといえば、頭部から伸びる誘引突起が光ることでも有名な魚です。バクテリアなどによるものではなく、自らが分泌する発光物質によって光ることができます。しかしながら、この発光物質が体内で作られるものなのか、餌生物などから取り込むものなのかは分かっていません。

静岡県には駿河湾という日本で最も深い湾が広がっています。ちょうど太平洋から富士山のそばまで、深い海底の谷が切れ込んでいる感じです。海底地形が急な場所では、海岸から2kmほどで水深500mまで落ち込み、最大水深が約2500mもある海です。海岸近くまで深い

海があるような場所では、漁獲物に深海生物が入りやすくなります。必然的にそのようなエリアにある水族館は、深海生物に「近い」ということになります。

同館は1970年に開館した水族館で、須磨海浜水族園と同様、昔ながらの汽車窓式と呼ばれる水槽の構成となっています。深海魚の標本もきれいに展示されており、見応えがあります。借用する個体を受け取るために、標本庫へ案内していただきましたが、多数の標本がしっかり整理されており、見習うべき点だと感じました。

チョウチンアンコウを受け取った後、ちょっと足を延ばして沼津港深海水族館へ行きました。名前の通り、深海生物に特化した水族館で、



↑汽車窓式水槽(東海大学海洋科学博物館)

やはり地の利を生かして、深海性のサメや、アンコウの仲間、メンダコなどの無脊椎動物といった深海生物を数多く展示しています。深海生物は状態良く捕獲し、ストレスがなるべく掛からないよう素早く、できれば近距離を運び、落ち着いた環境へ収容することが重要です。収容できて初めて飼育に挑戦できるので、地元の強みを存分に発揮していると言えるでしょう。生体はともかく、特別展では参考にした展示もあります。

今回の出張では、普段はあまり接することのない深海という点で動き回りましたが、標本の借用はもちろんのこと、そこで得られた情報に加え、新たに築くことのできた交流関係が何よりの財産だと感じています。



↑圧巻の深海標本展示(東海大学海洋科学博物館)

漁師!?!と呼ばれた飼育員 スマスイに新たなシンボルを!

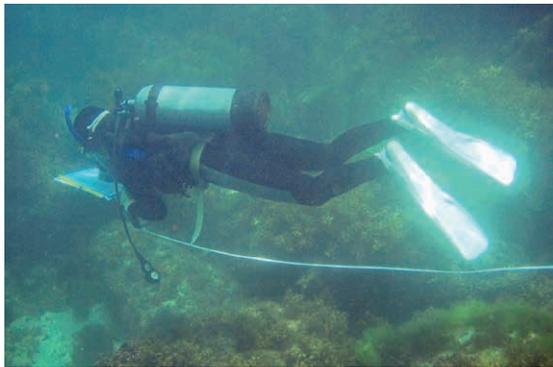


魚類飼育課 海水チーム
寺園裕一郎

PROFILE

1985年鹿児島県生まれ。各地を転々としながら育つ。2011年高知大学大学院総合人間自然科学研究科を卒業。同年4月から当園に勤務。海水チームのサブリーダーとして無脊椎動物の飼育に励む一方、フィールドでの採集活動も精力的に行う。趣味は釣り。休みの日でも常に海へ行くチャンスがうかがう日々。

↓学生時代のガラマ場での潜水調査風景



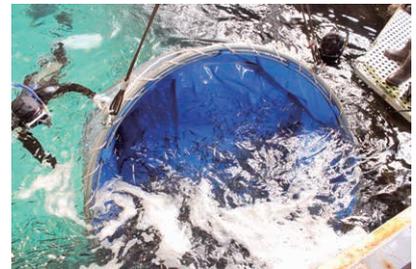
幼 少期、親の仕事の都合で各地を転々としていました。その中で最も印象に残ったのは奄美大島での生活でした。父は素潜り・母は貝殻収集が趣味で、わが家の休日は海に行くのが当たり前でした。同じく鹿児島県の父の実家に帰省すると、祖父の趣味である投網や釣りがお決まりでした。ある意味スパルタで、行動を共にしていた弟の方は大の海嫌いになりましたが、逆に私は海中の景観や海の生きものにはまっていきました。これらの経験が脳裏に強く焼き付けられ、大学では海や生きものについて学びたいと考えるようになりました。そして、日本で最も魚種が豊富に見られる高知県の大学で、魚類生態学の道に進むことになったのです。

研究、プライベート共に海漬けの日々を送り、振り返れば夢のような時間でした。そして大学院まで進み、卒業も間近に迫る2011年、どの職に就くか悩んでいる時に、水族館の募集をいくつか発見しました。特に強い希望があったわけでもなく、ただ何となく、自分の経験が生きそうだなあ、と書類を送って見たのです。最終面接になる頃、大雪で高知から出ることができず、1社を除き他は断念する状況になりました。そのすぐ後、最後の1社から電話が入りました。それが当園で、今の職に就くに至ったのです。

入社後は上司の海岸潜水調査にお供したり、採集や生きものの輸送に繰り出したりする機会が多く、時には大水槽から釣りでブリだけを捕獲し、遊泳速度のデータ収集のため機械を腹部に入れる作業もありました。過去の経験を想像以上に生かすことができ、今では天職かと思えるほど仕事が好きになりました。以来5年間、たくさんのフィールドを訪れ、生きものの収集や出張レクチャーに関われたことは大きな財産だと感じています。そこから新たな出会いも増える中、今では日本各地にネットワークを張って漁師の方々とやり取りしながら、生きものの収集に力を入れています。時には乗船して採集することもあり、頭にタオルを巻



↑深海生物の搬入(かっぱとタオルが戦闘服)



↑収集先から自分で輸送したイワシを大水槽へ搬入

きかっぱを着て事務所を歩いていると、他の職員から「もはや漁師やな」と突っ込みが入ることも。展示生物の収集で頼られることも増え、光栄な限りです。

最近、憧れていた「深海」をテーマにした常設展示のリニューアルや特別展も実現できました。次の目標の一つは「スマスイといえばこの生きもの!」というシンボリックな生きものを展示することです。「スマスイは何が売りなのか」と知人からよく聞かれますが、いまだに即答することができません。シロワニやピラルクなど目を引く生きものは展示しているものの、他の水族館でも見られる生きものたちが多いのは事実です。「これが見られるの!?それならスマスイへ行こう!」と思ってもらえる生きものが展示できれば、より多くの方に海の生きものについて知ってもらうきっかけになると信じて。今後「スマスイの漁師!?!」と呼ばれた飼育員にご期待ください。

**お客さまの
声**

お客さまから頂いた当園へのご意見・ご感想を紹介します。

深海魚展を楽しみに訪れました。まさか、リュウグウノツカイを触ることができるとは思っておらず、驚きました。来てよかったです!

孫たちが大喜びで、楽しい1日を過ごしました。またぜひ、遊びに来たいです。

パパとママと初めて来ました。大きな水槽がとても楽しかった。イルカのジャンプは大興奮でした!! また来たいです!!

水族園日誌

2016年7月～9月

7月

- 2日 スマスイ生きものスクール「外来種アカミミガメの解剖体験」
- 9日 サイエンスカフェ第34弾「ダイオウイカから始めるイカタコ学入門」
スマスイ生きものスクール「ピラニアのお掃除体験」
- 14日 夏季特別展「スマスイ深海研究所」(～10月10日)
須磨ドルフィンコーストプロジェクト2016(～8月31日)
- 16日 プルメール舞多聞でコラボイベント「おさかなウォッチング」(～8月31日)
- 23日 特別イベント「水風呂で夏の暑さを“ふっとばす”(foot bath)!!!」
- 24日 スマスイボランティア工作イベント「スノードームをつくらう」(8月21日も)
- 30日 混獲アオザメの公開・解剖
夏休み特別企画「イルカライブパフォーマンス」(～8月中土曜、日曜)

8月

- 1日 企画展「日本代表選手の活躍で増えるさかなたち」(～31日)
- 3日 深海展特別講演「深海の喰われる・ドラマティックな生き物たち」
- 4日 混獲アカミミガメの保護、神戸空港への搬入
シイラ展示(～18日)
- 6日 スマスイ生きものスクール「夏だ!!川へ行こう!!」
- 12日 シノメサカタザメ初展示
- 20日 浅虫水族館へアオリイカ譲渡
- 21日 ウミガメ健康診断「ウミガメ・エコツーリズム」神戸空港島西緑地にて
- 26日 エビクラゲ展示(～9月5日)
- 28日 (イベント)「生物の名前鑑定会」
神戸生物クラブ、神戸市立須磨海浜水族園 共催
「須磨里海の会」第1回総会開催

9月

- 2日 スマスイ生きものスクール「希少淡水魚と水族館」
- 4日 須磨救急フェア「いのち」をはこぶ救急車 適正利用に協力を!!」
- 9日 企画展「アオリイカの能力大解剖!! 今日からあなたはイカ博士!!」(～10月9日)
- 10日 サイエンスカフェ第35弾
「有人潜水調査船【しんかい6500】とそこで見た深海の世界」
- 17日 スマスイ生きものスクール「淡水ガメ水槽のお掃除体験」
企画展「身近な生きものシリーズ どっちがイモリでどっちがヤモリ?」
高知・桂浜水族館より搬入の土佐錦魚と芸術作品「流木と金魚」展示
(作品展示期間:～11月30日)
カピバラの命名式開催
- 20日 岡山市立千種小学校よりアユモドキ譲渡
- 24日 スマスイ生きものスクール「リクガメのお掃除体験」
- 30日 バンドウイルカ「マミー」出産

冬のイベント情報

企画展

干支展ーペンギンはトリでし展

2017年の干支の酉にちなみ、今回の干支展の主役はペンギンです。実はペンギンも鳥の仲間、空は飛ばませんが、羽ばたくようにプールの中を泳ぎます。年男・年女ならぬ“年ペンギン”の紹介パネル展示や、お正月特別バージョンのペンギンと記念撮影も実施します。

開催期間 ▶ 12月3日(土)～2017年1月29日(日)

開催場所 ▶ ペンギン館内東側

「ペンギンと記念写真 ～酉年バージョン～(仮)」

期間 ▶ 12月3日(土)～2017年1月9日(月・祝)

撮影料 ▶ 1組 1,000円



神戸須磨アクアイルミネージュ

3年目となる、夜の水族園とイルミネーション約300万球が楽しめる冬季イベント。光と調和した夜の幻想的な水族園を体験できます。今回は、初登場となる光の切り絵「ファンタジックアクアリウム」がエントランスホールで皆さまをお出迎え。今夏好評を博した、マッピング映像とコラボレーションした「イルカナイトライブ」もさらにバージョンアップしてお届けします。また、大みそかはカウントダウンイベントも開催。新年を水族園で迎えよう!

開催期間 ▶ 12月3日(土)～2017年2月12日(日)
水曜休(ただし、12月28日、1月4日は開園)

開催時間 ▶ 9時～21時(最終入園20時30分)

イルミネーション点灯時間 ▶ 16時～21時

イルカナイトライブ公演時間 ▶ 19時30分～

入場料 ▶ 大人(18歳以上)1,300円、中人(15～17歳)800円、小人(小・中学生)500円、幼児無料



●各イベントの詳細についてはホームページでご確認ください

- 開園時間 ▶ 9時～17時(入園は開園の1時間前まで)
※12月3日(土)から2017年2月12日(日)は21時まで(最終入園20時30分)
- 休園日 ▶ 3月～11月/無休 12月～2月/水曜(ただし、12月28日、1月4日は開園)
※別途工事休園あり

スマスイ

検索

<http://sumasui.jp>